

鳥取県智頭町で自伐型林業グループ「智頭ノ森ノ学舎」を運営する大谷訓大さん

若者に未来を託す町。 「自伐型林業」で 地域活性化



森林を管理する担い手の育成は大きな課題だ。法改正の目指す大規模化の方向とは別の、森林を守る方法はあるのか。町の財産である町有林を生かしながら、地域住民や移住者とともに小規模分散型林業を実践し、森林と集落の暮らしを守る鳥取県智頭町の活動を取材した。

撮影／越智貴雄 文／上垣喜寛

若手林業者に山を開放

国有林のような公共の森林を活用し、森林を管理する担い手の育成につなげている事例がある。中国地方の山間にある人口約7000人の鳥取県智頭町だ。

同町に住む大谷訓大さん(38)は、田んぼ約1・5ヘクタールと、約40ヘクタールの山林を先代から引き継いでいる。大阪でサラリーマンとして勤務した後、海外生活を経て、2010年に地元である同町にUターンした。

大谷さんが取り組む林業は、森林所有者や地域住民が山に入って自ら木材を切り出す林業で、「自伐型林業」と呼ばれる。短期的な生産量を追い求める大規模林業(伐採業)と違い、間伐材を生産しながら残った木の蓄積量(在庫)を増やす長期視点の持続的森林経営だ。低投資・低コストでできるため、現状の材価でも手元に収入が残る手法として全国で実践者が増えている。

15年に大谷さんを中心にした自伐型林業グループ「智頭ノ森ノ学舎」が立ち上がった。智頭町では、担い手育成のための事業に予算をつけ、所有する約58ヘクタール

の町有林を智頭ノ森ノ学舎に提供、そこを活用した、誰もが林業を学べる研修を委託した。これが新規林業者増加の大きなきっかけとなった。30代を中心に町内外から参加者が集まり、設立当初は6人だったメンバーは3年間で25人になった。

大谷さんは、「数年前まで、孤独に我流で林業をしていたのが、そのようです。今は一緒に学び、仕事をして、飲み交わせる仲間が増えてきました」と、身の回りの変化を振り返る。

「Uターンした私と違い、自伐型林業の参入者の多くは、自身の山林を持っていません。町が町有林を提供し、担い手の育成のバックアップをしてくれたことは、森林や林業に興味のある若者に最初の一步を踏み出すチャンスをつくりました」(大谷さん)

いかに安心して暮らすか

智頭町による林業者育成の発端は、14年にさかのぼる。

当時は、「消滅可能性都市」という言葉が全国的に広がった頃だった。若年女性人口の推移から将来の出生数を予測し、全国の地方自治体をランク付けしたもので、

おち・たかお 1979年大阪府生まれ。フォトグラファー。パラスポーツの魅力を伝えるメディア「カンパラプレス」代表。写真集「切斯ヴィーナス」(白順社)。

人口が減少した町の将来の姿を数値で示していた。国は「地方創生」を叫び、全国の自治体に将来ビジョンを立案させた。

智頭町も15年に「まち・ひと・しごと創生 智頭町総合戦略」を発表。人口減少に歯止めをかけるというよりも、減少は避けられないことを前提として「いかに安心して暮らせるか」を中心課題に据えた。

柱の一つに「自伐林家の郷」という構想があった。同町は、面積の約93%は森林であり、林業で栄えてきた歴史がある。この地で、林業の担い手を育成することは新たな仕事の創出とともに、森林の継承者の育成にもつながる。構想の具体策の一つが、町が持つ町有林の無償提供だった。さらに山の所有者と新規的林業者をマッチングさせる「山林バンク」をつくり、都市住民を自伐型林業者として受け入れる「地域おこし協力隊」の制度もスタートさせた。

しかし「安心した暮らし」は林業だけでは実現できない。そこで、森をフィールドとして自然の中で幼児教育を行う「森のようちえん」や、子育て世代の移住希望者向けに、すぐに入居できる住宅のシェアハウス事業を後押しするようになった。

町の支援策の狙いは的中し、林業に魅力を感じた町内外の住民が集った。提供された町有林が、新規の自伐型林業者によって整備されていくのを見るうちに、町内の森林所有者から「山を任せたい」という声もあがってきた。山の管理を任されて林業を本格的に実践するメンバーが誕生し始め、町と山で仕事をつくる兼業型の林業者が智頭町で生まれている。

「山番」が森を守る

智頭町の活動を調査している鳥取大学地域学部の教授、家中茂さんは、自伐型林業を展開する若手グループの働き方に注目する。

「これまで林業と言えば、森林組合や事業体で、専業として従事するのが基本でした。自伐型林業は、複数の仕事を組み合わせた『生業』をつくっている林業者たちが多いところに面白さがあります」と言う。

智頭ノ森ノ学ビ舎に合流し始めたメンバーの過半数は、一度も林業に関わったことがない未経験者だ。料理人や保育士、大工、パン屋、庭師、ゲストハウス経営者など、さまざまな職業を持ちながら、森と関わって暮らそうとしている。

中には、町の福祉課と連携し、福祉の視点から地域づくりを担う「生活支援コーディネーター」も生まれ、高齢化する過疎山村の貴重な人材になっている。

家中さんはこう続ける。

「智頭で活動する若手の動きは、樹木を伐採して販売するという林業を柱とし、山村の暮らしに根ざしています。そこには、新しい助け合い、互助組織の可能性があります。過疎化する山村では、旧来の互助組織が弱体化し、社会の変化に対応できなくなっているところが多い。自治体やNPOといった組織が代役を担うには限界もあります。森林という環境のもとで、自然の生育の範囲で生活し、仲間同士が小さな仕事の創出を通じて生活を安定させていくような智頭の若手のコミュニティはこれまでにない動きです」

同町には、「山番(やまばん)」という言葉がある。山の番頭さんの意味で、一度携わった山から離れず、責任を持って手入れをすることに由来する。限られた人員で広大な森林を伐採する林業とは別に、兼業型で自伐型林業をする人たちが山に張り付き、森林と集落の面倒を見る。それが、過疎の進んだ山村でも暮らし続けられる智頭町の形だ。



大谷訓大さんの住む、鳥取県智頭町的那岐(なぎ)集落